

曉齋畫談外篇
卷之上



巨勢之

如空曉齋所藏硯

子 4
199
3



時齋
199
卷一



曉齋畫談外編卷之一

東京門人梅亭我叟編集

○師三才の時鷄帯で蛙を作り始めて宮

曉齋河鍋洞郁先生、天保二年四月七日、下総の古河小生、
父を甲斐彦右衛門と、師猶乳房と、合むの幼稚より画を
好むに癖甚し、草双紙急意繪何ふやら、本國の有る物を
見れば、他の遊戯を棄て、是と取り、菓子饅飯と求るを、忘ま
條会ふ、一、回、了、惡、我、と、一、子、小、餘、ハ、何、ハ、ま、ま、画、ま、
と、宛、行、了、是、ハ、氣、を、福、さ、せ、る、と、常、ハ、方、々、り、師、三、才、の、若、母、小
誘、れ、れ、母、乃、郷、里、あり、上、召、館、井、の、在、喜、梅、村、小、任、任、館、林、藩、小
回、口、七、左、衛、門、方、に、到、ら、ん、と、一、母、と、共、小、駕、籠、小、乗、り、て、蛙
供、カ、男、師、ハ、慰、ま、ふ、と、一、蛙、を、捕、之、て、又、ハ、師、是、を、菓子、饅、飯、小



曉齋畫談

瓜生政和著

河鍋洞郁画





外ノ二

外ノ二

中仙道
熊谷立
の場

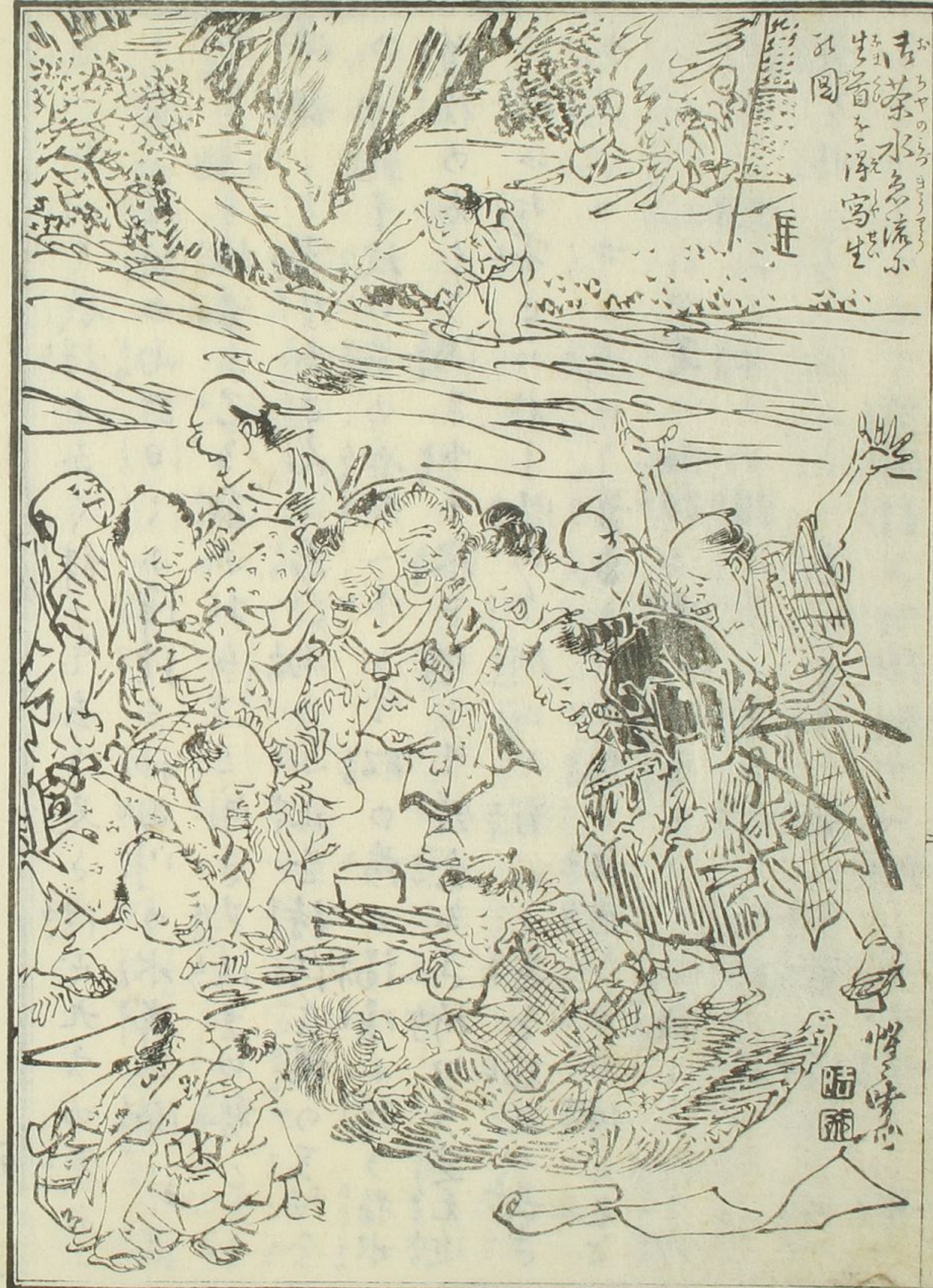


入り菓子と共に傍に置まば供に泣く小笹の枝を採らせ前
貫ひし持しる如新申を出し小笹の枝を長短に折し
小美し是と豆と做して柱の形に作りたれど徳の男もた
駕籠を昇たる若ら手を拍て是ハ出かしたる放せを飛も考
すまざとて譽獎せしも理ふらん斯く青柳村の田口氏一
着せし小師ハ所敷の偶一往き菓子袋の菓子と投を何の
持たる各立と信て彼の柱を菓子袋一穿生あやしが穿生の
始めありし望みん

○師一勇斎園芳の門下又生首を穿生
斯の如くあれバ父も其好む所小従がハせんと江戸小川
湯島茶水の火消屋敷小居らせ七才の時一勇斎園芳の門
下ハラせり因て浮世画を学びたきども師の心小深なる事

有しを以て幾程もふく諱しを去り又と往て九才の夏名小
一負ふ鼻目の雨は日く小降續き神田川の水岸小漲りて濁
巻き流る抹常小なる取小あらばと聞き其流きの勢ひを
俵親しき穿生ふさんと思ひ雨の小止を待得て揚の馬物今
の師範学校の前の谷間一下り舟の荷の揚場小到り濁水
道橋の方より濁き水の水を穿てて餘念なき折から足元迄
く波小未寄せられし物あり何小や有んと是を忍れハ長き
毛泥水の中小靡けり簾電とソ小物々杯思ひ手を伸て毛と
握み引揚れは是ハ如何小男の生首ありし故得として俵
投出し遊人と為しが踏止まり泉目右人散師の造つたる生
首を好む穿し採りたる事あるも其の生首ハ得難き物也
る未だ穿生せず其得難きを得あがら怖しとて穿し棄る

おちやの水多流ふ
 首を深窓生
 の目



惟
 心
 画
 龍

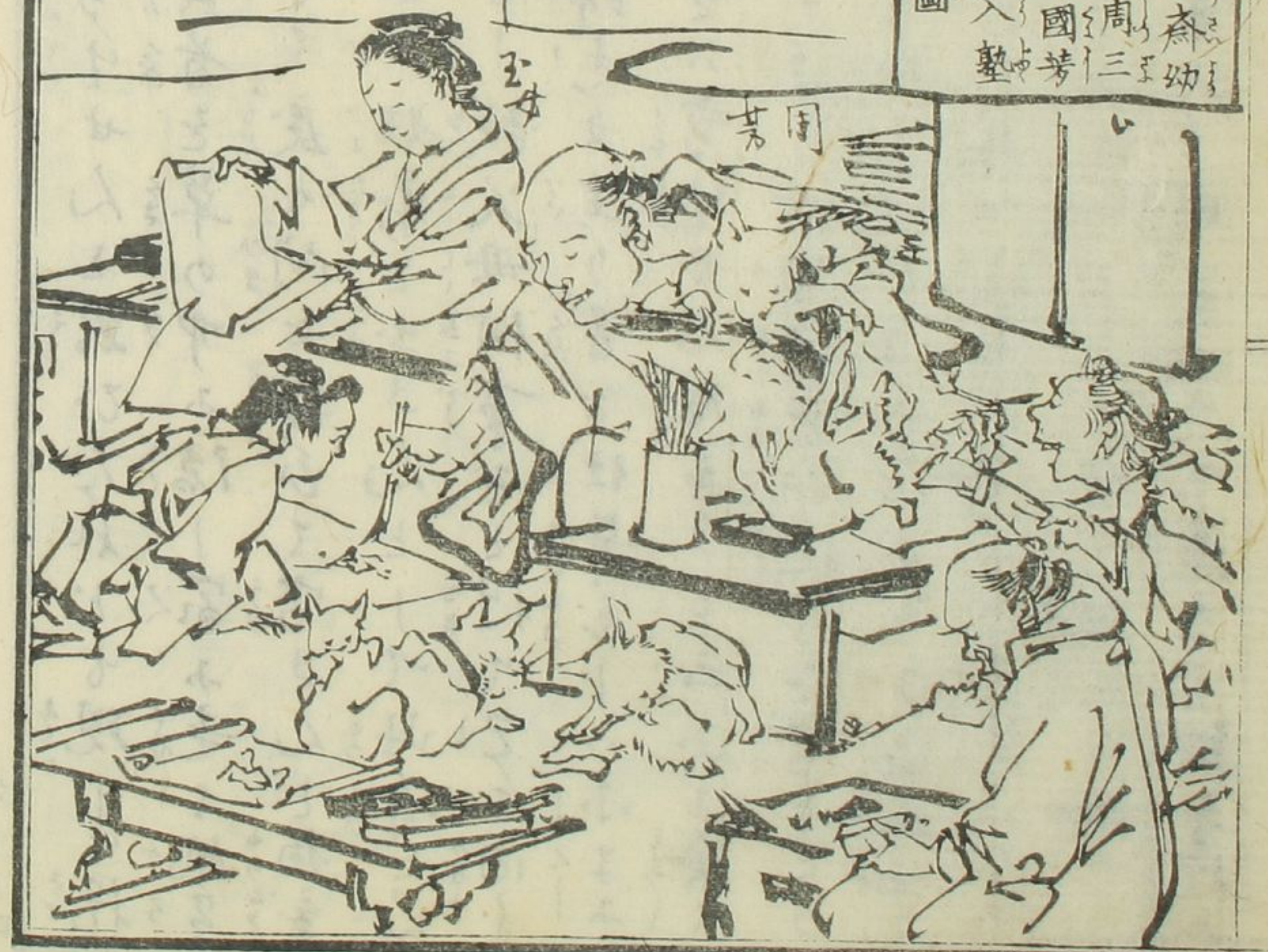
外上ノ四

ハ強合あり家小持帰る字生せんと思ひたれども現しそ提
 たり答られんりと思れ其首を草の中不隠し家小走し風を
 敷と持来り首を是小包にて度り間を窺ひて寫さんと物主
 の偶一億しきたり然る不下婢影を出さんとして此首と刃
 附キヤツと叫びて逃せし故父母何事ぞと泣て又て回
 怖り驚く事大方ならず師走女至り首を仕舞ふしハ小子不
 云く乃訴あり拾ひたせバ寫生せん者ありと云ふ小舎
 呆れり呵りも做さば居たりしが彼程思ひ込しを寫せざら
 も不布意より然れど答られし時言許せんふを矢張揚揚が
 里うらんそり首を薦小包と再び揚揚お遣られ其薦の上不
 て是を寫し小流来々せき而あれども子晚る物山を做せし
 が幸い小答むる者なく書終る用意做して来りし親馬經子

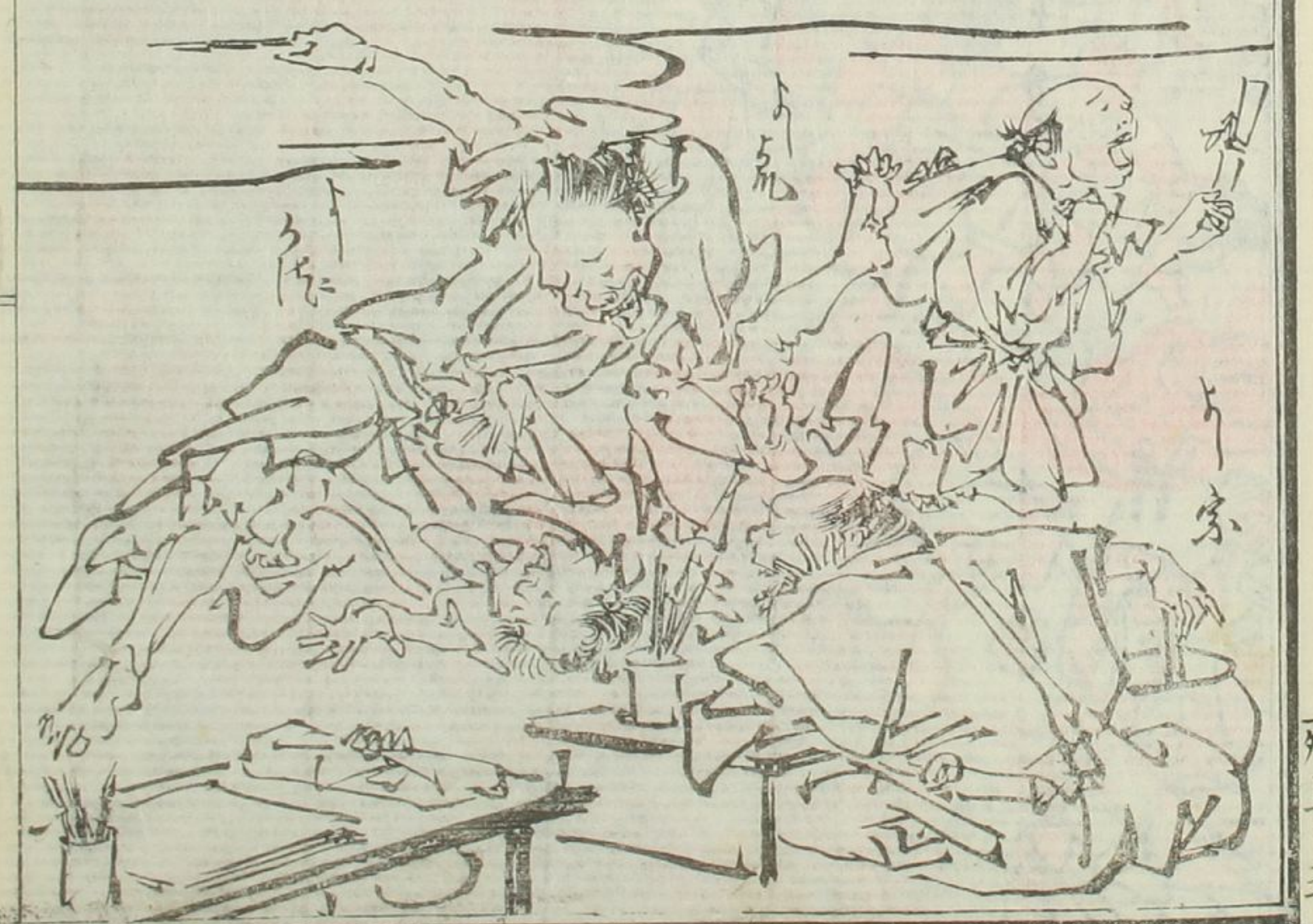
首を包み又流し水幕
 と做したる小未だ十才
 小を充さる小児の業故
 う幸ひふし官の礼
 小も遇ざりき人足を
 聞き画小熱心のあり
 必する剛膽ありと評し
 歎しぬ

○暁高幼時國芳の塾
 暁高年甫めて七歳因三郎
 と云しとき故一勇齋國芳
 の門小苞ぶ國芳を足法費を

暁高幼時國芳の塾
 即時周三
 國芳
 塾



好むの性質多る故師を奇童
 とし愛し常小教て云我
 武者を画を好めども其據
 処と考る基礎を浮べ一時
 宋人李龍眠の描き水滸
 傳百八人の像を見り大い
 小感ぜり処有小より是を
 摸し錦繪を画たり小初
 めて國芳の名を人々知ら
 る小至りて思ふ小武者
 を描く小突坐小人を捉お
 ち投らせたり身振小目と着





丙午年九月
 大御所様
 馬場
 火起
 の
 図



徳川
 家
 印

御茶の
水大の
神火の
の祝の
燈の
るの



外上ノ七

外上ノ七



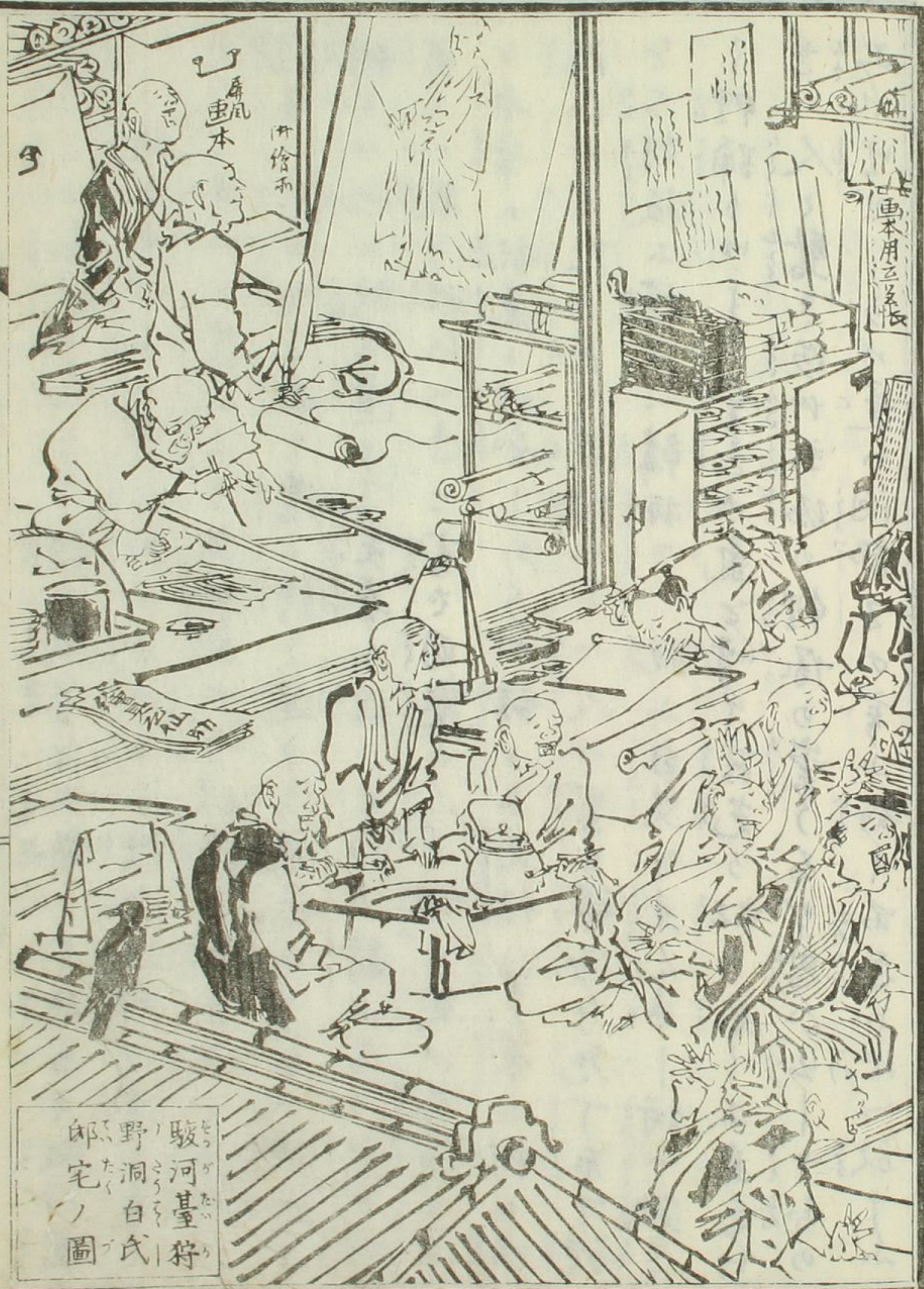
或ひの紐伏し返返さんと有る体杯心をして其息込を画一に
因て辻小喧嘩有るを驅け見物裏庭小入り主婦の言多し
を尋ねあきて此れ一事を有る然れど故有て一勇高おは注し故たり
○丙午年の火事小鳥の飛立せ我家の焼るを宮生氏
弘化三年正月十五日本郷丸山阿部侯の上地より出火し
西此の風特小猛烈ありしを忽ち小焼度り遂小佃島の
限り小迄及びたり是を丙午年の大火と云ふ此際小本郷三
所日小位せ幕府人多の用を達せ越前屋といふ者有る
戸鴨籠小何小れ御さるいふ一火事を達せ諸の多と籠
小のれ揚の馬場の焼傷一運び込もたる小諸方より小種く
の荷物を擔き来り此処小置り急度焼い忽ち單首葛籠小埋
こ火の子その上小落敷りそ取くしり燃揚りけしバ越前屋

の主人籠の鳥の焼死んとを懸籠の蓋を明し鳥と懸く放
したる小其鳥一度小飛立ち燃焼る火の光り小美し紅翅の
色映ト花と紅葉と蔭敷したる如くあり持小籠の美藤
さ小彼よくと聲と掛けんと空と見上るり去馬の鳴るさ方
一飛や急火小焼れ煙小巻れ空小堪得ず蔭ひ落るさま珍ら
り小一々又哀れあり此火ハ之師が住へる火消を救の方よ
り移り来りしあれを此時火消を救ハ一面の火とあり跡が
家あり火既小燃附て人々力を盡し家具と擔ぎ出す中少師
ハ唯硯と筆と紙とを持出し風さき小積上たる荷物の上小
眺り鳥の飛立たる様と我が屋敷の焼落る所を寫せし
るハ則ち小揚たる二葉の園あり親族の者之を兄々大小可
り他人さ一驅付荷を運び出して接を為す小獨安閑としそ

画を書き置たるハ何事ぞと言れ天宮を捲あぐりて吾我も存せ
運び居たる小鳥の飛立たるを見そ古人も画うざる事國と
思ひしを是と寫生あせりうち其処の燃立さし彼処の燒
落る体お心を奪りて我を忘れて書居るありみ免ふこと
言ひあぐら火事頭巾冠り飛出たれど猶ほ方少き
火炎の勢い煙れ立分火消の御き人の駈走るるとお心と止
て更ふ餘念いせりしとぞ

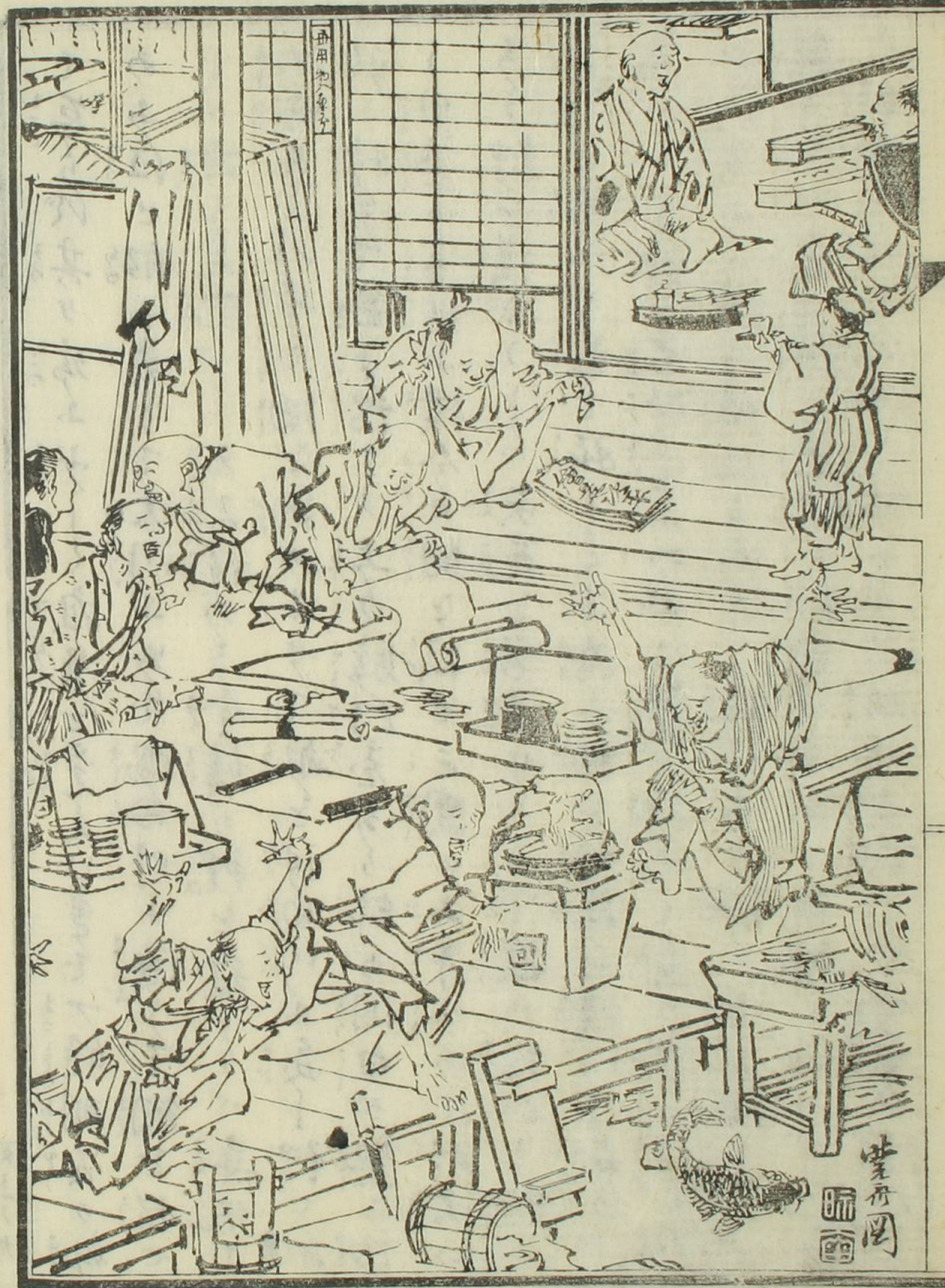
○寫生と為したる鯉氣を吹て人と只怖さ
東谷駈向臺の觀音改小暮おの画師して狩野綱白とソノ人
ありけり當時そ奴の妙手あるが故ふそ門小遊びて画と學
ぶ者多し師も又人の進めふより十一才の若その弟子とあ
りて入塾あり同塾に書生お負ト心をもり晝夜の勉強を積

て寫らば其が為小少く夜号と覺えりきを一時朋友の御
めお任せ船小棄りて大川小舟を隅田川小瀬うそ網と投せ
しが終り小際しそ三天程ある金鱗の裡を獲しりば喜悅を
大方ありて早し細と納めさせし船を神田川小舟し輕を解
頭お持をそ昌す物すより駈行意ある師の洞白が塾少海
り回塾の書生小僕今日細と投せ三圍のお年下少て此大い
ある鯉を獲りしは天是と寫生せよとて授け給ひし物お
らんと思ふも最と嬉しうて直小細を切揚げ獲つて長りし
ありしとそ輕を大盤臺おつれり塾お持込しそまき春お後小鱗
小尻尾お三十二鱗跡るあり種くあり体小宮し終り筆と
投て先一息と傍を見れば何時の名おり回塾の人くが椽
お姐板と居え大皿大鉢おどと双ぐ立最もや寫生が富た



駿河臺符
野洞白氏
邸宅ノ圖

外上ノ十



堂存圖

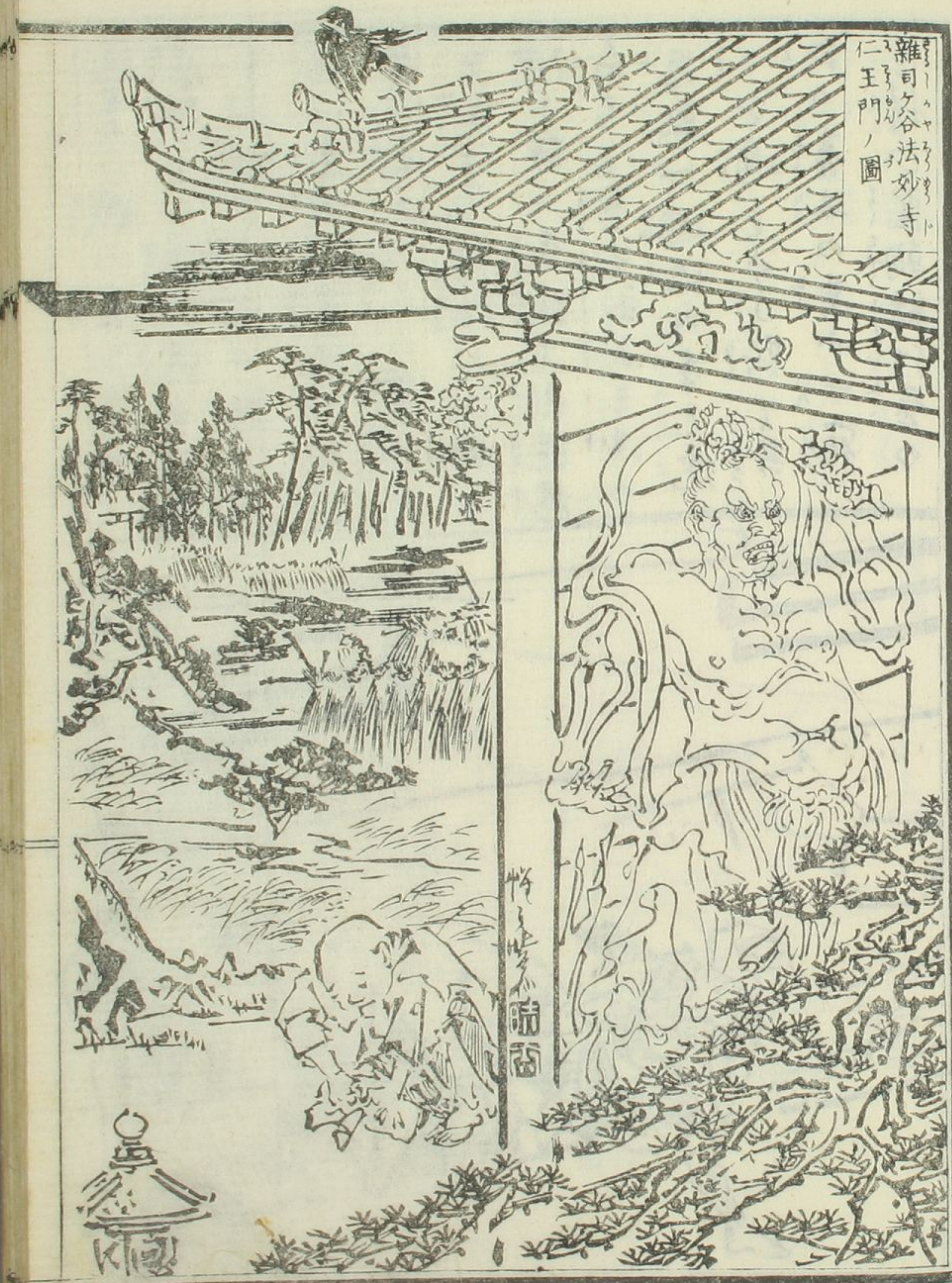
む厄丁小取搦らんとして鯉の盤基を大勢して持出す故師驚
して押止め心奪とを仕給ふものう不僕今此鯉を宮へ移
たるが為の小童の心奪ふからば滅少鯉を画くの師と
難有く思ふあり固く移を迷うる後思ふる言く持性
難免の池小放ち遣うて天壽を保とせんと敢ふる言く持性
君らの版と肥れづきと言を回塾の人々嘲り笑ひ吾此多倍
が平常の乱暴を以合しからぬ辞く不正銘江戸茶の鯉の味
法心の手際を見居居給くと一人の男が袂拂け死下り鯉
を大奴板小核と一隣控下り既小白又と立ん為し時一跳言
く鯉踊り口より金色の氣を噴き其光り虹の如く小見之け
きバ人々驚き沙州新堀の鯉塚の常るある思ひ出し十分の
早れ生ぜしりバ是ハ河部子の言小如く不忽の池一放す小

外上ノ十一

如す我も由援け、俱に換ひ法んとて鯉を又大盤基の中
の書生大勢扱ひ思ふが固へ荷ひ法ま辨免の池小放ち遣
りたり此時より一師の鯉を画く小人の末小心附さる
不思儀の筆意を得たりとて小又法鯉の吹くる氣の後者小
向ても今小島何たるを解せむとあるん

法妙寺小に五の圖を取り帰路賊小出遇ふ

東府の西の街外小難司が答と呼ぶ地あり此処小多ありし
鬼子母社の参詣の人群集ありたる御堂ありし今この境内
寂たる法華堂より法妙寺とて小常寺の表門小安置あり
とて仁王尊天を運慶の作とて其名最高一師一日此難司が
若小法き仁王の像を宮して餘念をりしが梢小鳴噪く鳥小
聲小心附首を回らして見色ハ日ハ西山小落て四辺霧降く

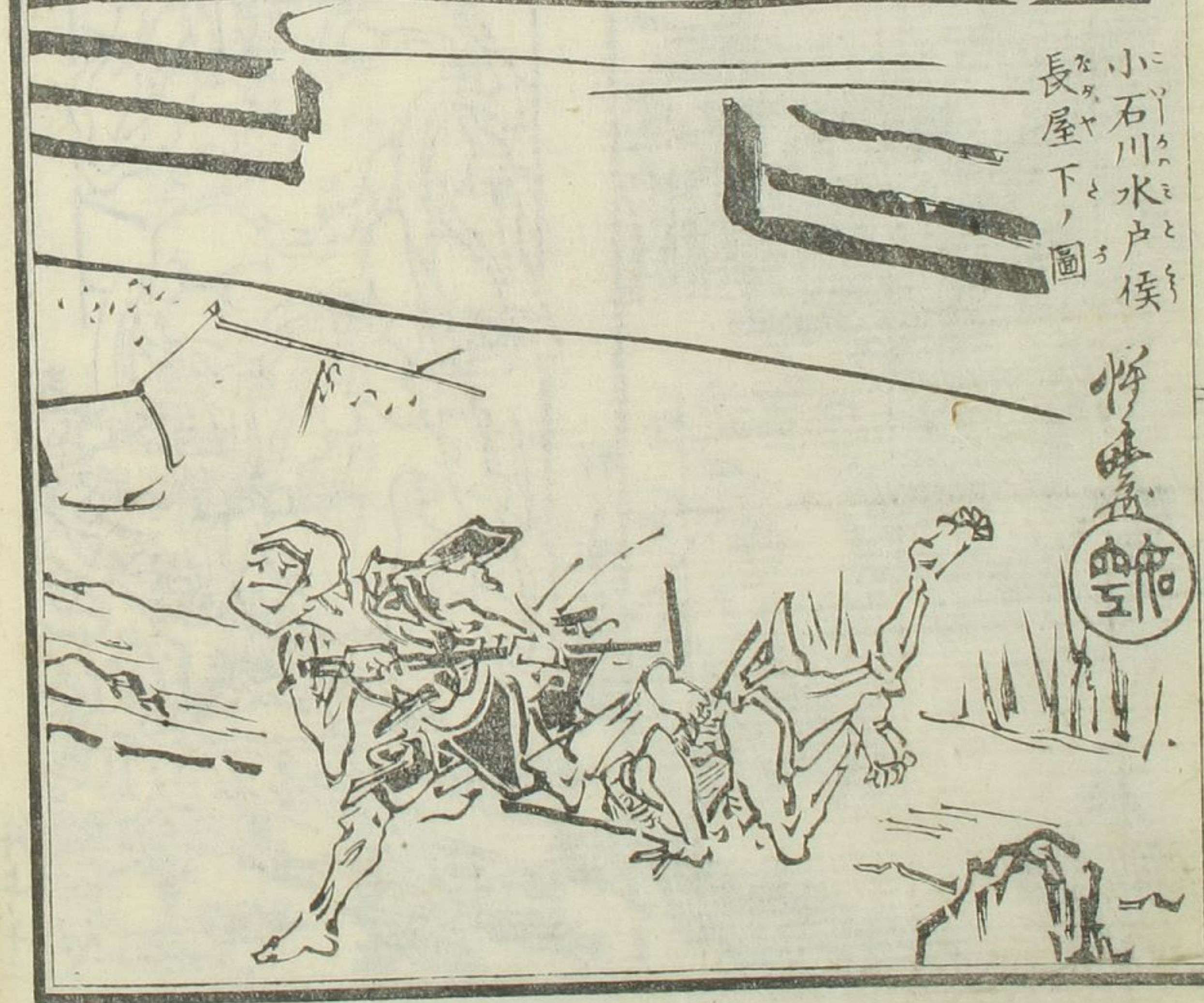


雑司谷法妙寺
仁王門ノ圖

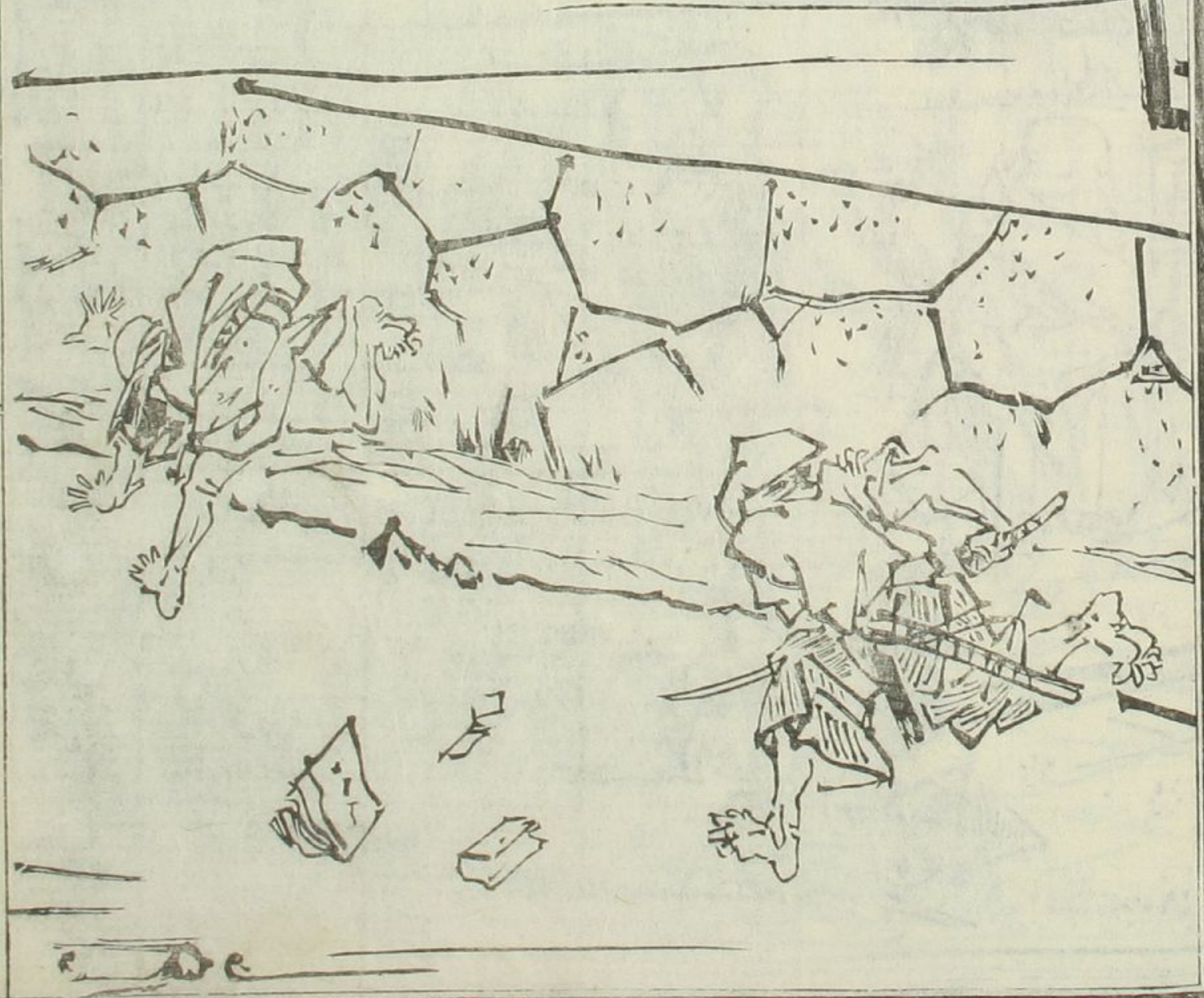
外上ノ十二

ありたり茲小松心驚き道の遠きも忘れて思ふ寸日を當
 たりと急ぎ矢立を腰に挟み宿を懐中する法妙寺
 と立出るに早鬼子母神の堂あり燈附たり因に豆を子め
 目白臺の通るを真妻水邊所一あり江戸川端より回水戸
 候の百間長屋下今の砲兵本藪の所一あり頃既に成の
 刻とあり四辺にふる處所あり故門を守り犬の聲挨拶の留
 のと出る師の元来淋しき杯の頓着せぬ故橋法妙寺の景色
 ろを胸に算し注ぎお白刃を提ぐる三人の男実色と現
 れしを左におし師が神と捕んとせし不怖り突降け膽魂魄
 と諸共小豆を飛し逃出せし三人の賊ッレ捕つらと聲掛
 け白刃を振り追ふと急あり師の雲霞を踏思ひしつ水戸邸
 よう流せぬ細川小渡せし石橋の端を走りて通る越人と

追来し賊の首を長屋と
 思ひし一人の賊が流
 れ一尾狐と走込んを落
 たり秀小二人の驚き是
 を即けて引揚んと為り
 湖小師ハ走延て水邊橋
 外あり青木新五多清の
 屋敷へ逃込み辛く虎
 口を適ききり斬て其
 夜青木の葉小一宿
 を寝し翌朝駭河臺の



狩野小辰り合整の若小
 昭夜の話一めて残るる
 其物れ小足す下年来
 破此処にて圖を取りと
 る手帳を包の俵あり流
 せ一ありと頭を無腕を
 組之落擔ある其折か
 ら玄關小来し人ありて
 取次乃小侍小一拙僧を
 小石川傳通院の正眼と
 中者あり所お水石炭の
 長をいりて此包を捨ひ



幅紗を解て括れハ字
 生の手帳と覚しき小
 駿河臺狩野塾洞部と
 託して有し故持系な
 たりと云ふ声遠く
 聞えし故師ハ飛で出
 其倍の厚志を耐し塾
 一稿し夕アの様を
 画小書て話したるを
 則掲げし下の圖あり
 傍々此画を大ソル好
 一足を師あ乞ひ懐中

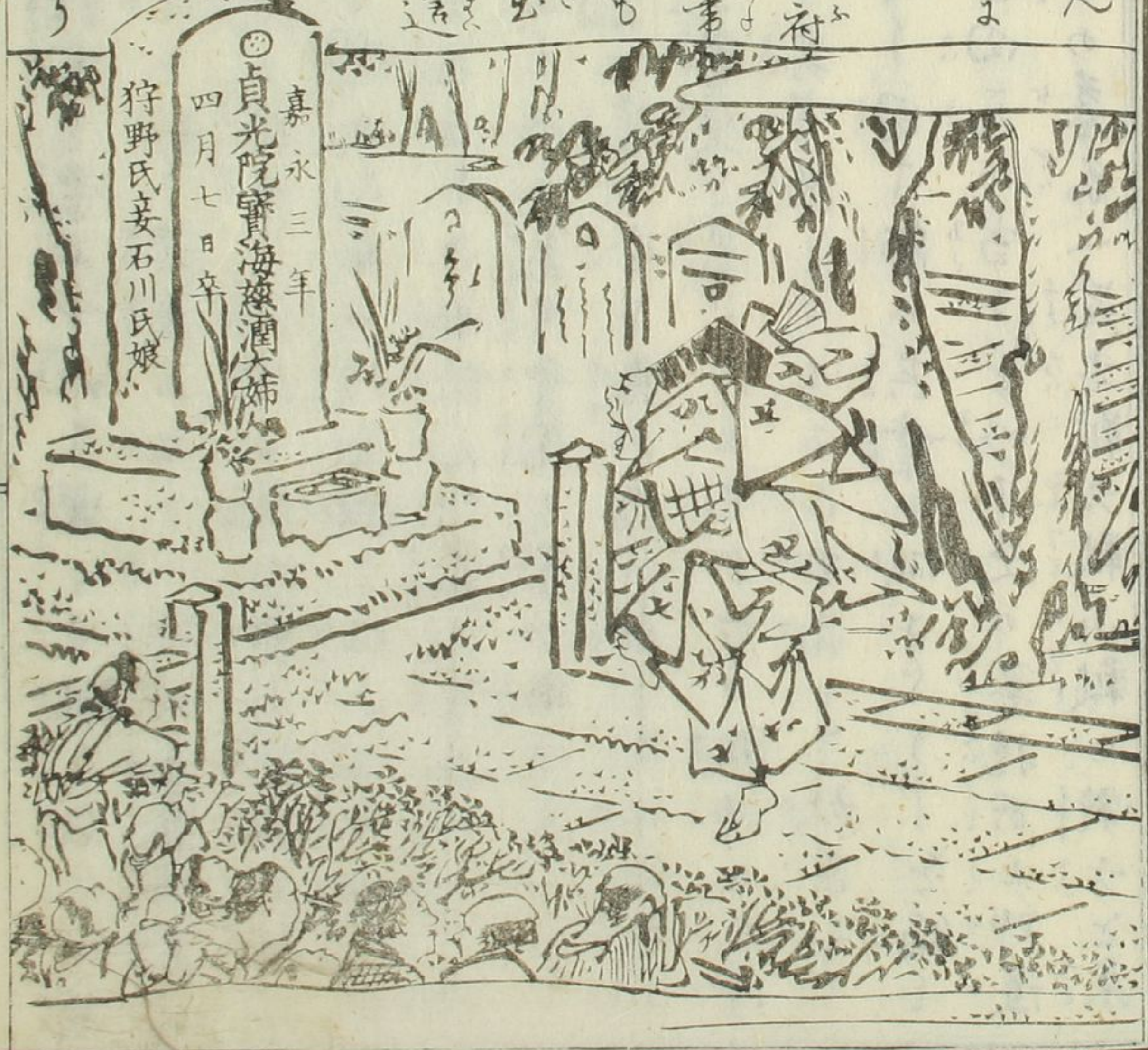
貞光院
 墓前
 三番
 舞
 圖



小し帰りとある

○貞光院の墓前
 三番舞を舞ふ

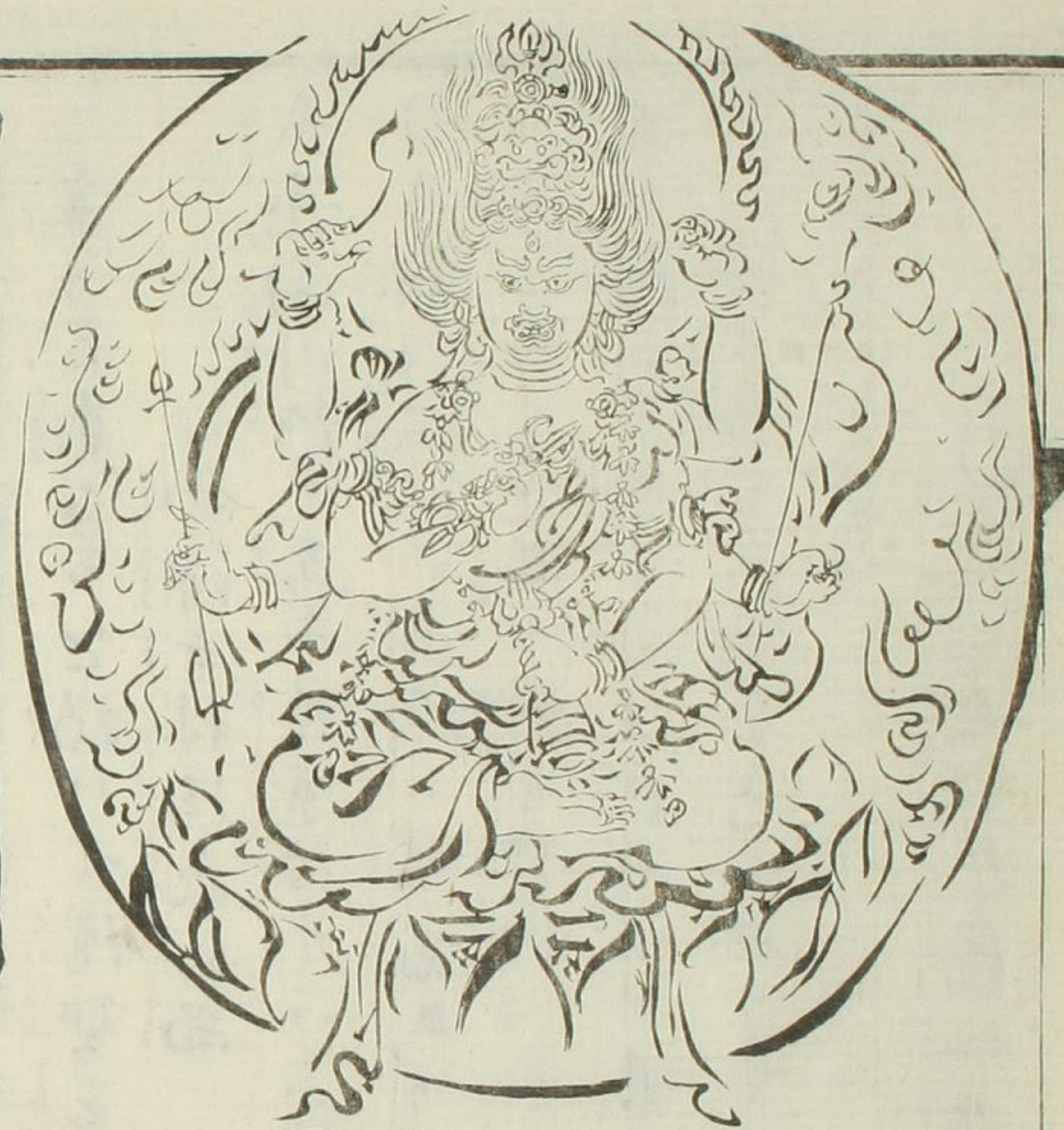
狩野洞白ハ徳川幕府
 の画所ある故塾生輩
 小數十名居り何れも
 夜ふつると塾を抜出
 て淨瑠璃の替古所迄
 入りし有り軍書
 講談及し嘲しめ字
 一往ありし思ひく
 あり其中小師ハ獨り



密小間を得意に能狂言を学ばせりて樂こと做し且身の運
動と解しとせども是を知る者更ふに一時洞益春信男狩
野隊信の母貞光院と謚せし人昨又同て塾小在若刀祢ら
ハ何事も樂とありと聞ゆ人身の河を做し結ふと云れ聞ゆ
れば狂言を習ふ中を告る小母信んや高も若き村よりは
業と好り狂言を習ふとあら高共費用の金の所けせん
是より此母小狂言を学ぶ金を恵れたる無しや母常ふ
其身を踏とらるの三番叟を見しと乞れける故師も又得
意で辞ると考し其事果さる小母病とて故果る
も黄名の藉ふつれたり因て師の共業を做さるしを悔
嘉永四年四月七日三回忘ふ当りを以て史の菩提所上竹漢
國院ありと光院信女の墓前一箇若靴大靴小靴の數方と集

一昨ハ是りて三番叟と辞たりけむ近方ノ洞益
元見物あり氏佛心若の厚きを憾とぬ此家小出せし師の
洞都が寫生做したる當時の様あり故今またその圖を採
り事の表裏ありと掲げて滑稽者流の看るものと為しける
○西淨寺林法泉和尚
武花岡川越の五小松原村やソ小町や常村の西淨寺小僧藏
する林法泉といふ人の暖高氏の門人ありが幼稚より大い
小画を畫むと好し妙と賞へづまに不動明王の像と壽深明
王の像より因て今法泉和尚が常小得意として筆と採とふ
その畫深明王の圖と常し出さる此小掲中同門二三子の
為ふふすと云ふ

○欣澤寺大江學翁和尚



林法泉和尚
画室の圖

如定梵私畫
晴印



伊勢國山田の飲淨者住職大江守翁も又吟高氏の門人少く
 画と書と好むおし佛画も長トたり若寺に近江中洲の大地
 を以て知れし源宣上人の筆と據りたる隔紙屏風衛立天丹
 小々吉田兼好が樂書ありたる物なりて遊歴の風流家又好
 事の人々の鑑見小注く所たり前年火災小罹り終つ純矢
 せ当寺を字棟失後ハ住職大江守翁ハ其再建を計り法國と
 遊歴して勅化奉加を頼むを先てあり仏画法堂上人圓光
 鳥河波の善あり好む小熊トテ筆を下し之と画して施すの
 志し小報ゆるい宮小風程の所至なりと氏ハ其様を因して
 愛小奉たり

○貧翁小画と書て共ふ
 本郷を所少住居左官職佐十と云ふ年七十近くして壁と成

大江學翁和尚
 仏画を描くの因



大徳業



たれども元世中の若るれば是を衣之衣
 あり故飢渴身お迫りてぬと方なき津
 とて暖言氏之と憐細川玄以法帝が比
 詞以素能の合狂言小基を後編
 の心と以て言たると地獄界不業氣を
 るよ十王の閻魔王を師とて五逆の真友
 のあやみ塔松葉よ玉ま
 の女ふ附人事と影鬼の
 長く角を切ぬる是と
 角田工も考まき小
 巻鉢と椀に死獄のな
 の後より強陀め束の如二種あり
 り飯糰肩人おあんとてそまな



左官佐十地獄の不幸と物語

世の

とせし様と画して呉えたりれば佐十大夫お喜び申す表号しや
の繁市場小持は是と飾りて畫の譯をばしたる小見聞の
拙物小寶藏を授けたる故思ひの金の貯へ神田橋本町一お無の家
を求めて引移り喰言氏の許へ礼を奉り再生の恩を謝したるごと

○曉斎氏女帯の模様を穿す

筑前の大守黒田筑前守公の大小画を好む様ひしと似
志永七寅年家傳の画師尾形洞霄撰書始々其外幕府の画
家の内より其繪を少くして其用を勤めたるが曉斎氏も又是
が其人たりて因て霞ヶ関ある黒田侯の上屋敷小通御方せし
が一時曉斎氏画所の物見小出道徳人と稱の石たりし奇
羅美小粧の飾り所殿女中五人うち連立を往りて是を見
るより曉斎氏名を在敷と授けし波の所殿女中の後を追ひ

け漸く是つきて女中の尻小着注と三四所紐小しを履敷
疾より一人はとと養父坪山洞山お告しりば父の且呆れ且怒
り曉斎氏と呼び近づけ汝去る日お殿が園の画所を授けし
て云々の事有たる由は左程の好色ありし画畫お成得
ぞしと恥ぢ少くあらん以後の筆と授けし藝者の所廻りや
半一女の尻小所へおけりて好りんと呵られ曉斎氏を意
を授けしお史と太いあるお弟あり黒田侯の宮中と通りたる
所殿女中が御ふしに模様ある帯と見たりしと名止たる故
追ひ付け往て其模様を穿し取り来りしお好色の為おわら
ず其取り来りし帯の模様は則ちありとて宮へ来りしを父
小見せけりて父の喜び左様より有しりお女中お所へ
往りしおハ帯に御しけりしと笑ひしが是

扇も又之を聞きあひ

受て七 浴ひとぞ

巾着 したるは其

町の女中の帯の接

接あり

○ 喧嘩式が法方の

神社沸間一巻納画

二匹の図

下野国日光山お鎮

坐す一ツせらる東照

公の御神意は芳り給



外一ノ二十

沖廟所修慶ありふ

けり 徳川幕府天下

小令して狩野家の内

より描く古画あり

へあり 細密の彩色

とぬせし時 暁斎氏

も又その後子撰まれ

狩野 梅香外名と

共小り光山の沖殿

小使と此双小を

日久しきの後漸く

申切を奉りて江戸



同
東京神田明神衛立奉納画

雲漢筆

欄
細
備



外ノ二十一

豎六尺
横九尺
總金地墨画

明治廿五年四月廿五日
如空院画地取

如空院画地取





外二廿一



河鍋曉齋ノ筆

龜有大夫田村講中ヨリ下總成田山へ奉納ノ額

總金地極彩色

横九尺 竖六尺

惺々曉齋画



同曉齋ノ筆

曉齋洞郁陳之画

神



外三十三



總金砂子極彩色
豎四尺
横六尺

明治七甲戌年三月廿五日

湯嶋天神開帳之第

奉納繪馬之圖

つゆりたりしに出来好といふ賞せらき再度西條楓山
御尋屋の伝竹庵ありて丹青の多用附居を盡り是より古名
画の獲ひるごとし大い其他の唱事と交内賞興も其
後と東照公の守護を尊と録り芝山内里の尊内堂河原
のしよ狩野洞白外二名を擧ぐり少きしを搦信のまたる雄の
又孔雀の彩色とふきり足らとついで徳川幕府より深く其
筆勢の活潑あるに至り又々極めを温かると彩色官画
の細うあると愛せられし属内河内附居最氏が神社仏堂一
奉祀の繪馬額と人の者おまたりと教多くし今更お昇一
昇し難しと難も多し存常お筆と探らむ或ハ二三年狩宝
る物たり或ハ半日一日おし一筆上る物あり就中江右神田
明神の獅子の如きハ氏の住居する湯島四丁目おをまると以

そ神官同室氏お要祈られ連不足を法公ハ法合たれども或
ひハ事お約せ或々氣の進まざるより棄ててはお客に於て
明神の神職より深浸せしむに便を以て一筆紙を以てし果
ハ日におまれども程棄ててお断ざりしハ神職の人とも果
れまて今ハ他人おまさんとしハ画工既ハ換りそ人筆と採
んとおるお日お是を聞込急ぎ明神の社お至り遷滞の
言解しそ日筆と採り僅お三時間お過ぎせし上たれ
むハ手と採り三年間おしりて催漫ありたる画が三時間
お出来たりと笑ひたりしハ終ハ氏がおお処異表お出り他
と回トからざるハ斯の如しお前ハ周ハなる獅子お是あり大
森長七が鬼女と闘ふ圖ハ大矢田村の講中お新れりまハ成
田不動の尊あり又野見宿禰と當麻蹶速が角力の圖ハ湯

島を満宮開帳のとれ其氏子より頼を請へ来たる者あり
 りかゝる類と奉り出せを濱の砂子の衆に告ぐしと且煩
 まが故み只是等の物を揚ては事ありと云証と為すの事

○小澤芳兵衛の像を画く

照澤町の煙子高小澤芳兵衛と云く若かり長病小雅り医
 療を考へたれども驗されを駒込帝町の草津温泉小寺り
 湯治を考へ居れり然るに晩裔氏も此温泉小遊び小住たり
 小細町の麻屋久吉と芳兵衛といふて新さある中板
 久吉信の芳兵衛の座敷を見舞ひはと晩裔氏に同座居る
 よしと語りけきバ芳兵衛大い小病び然るに先生を請ひ
 我が姿を画り芳兵衛呉らきよと頼れ久吉信氏が許し到りは
 申と語すと氏に昔話しく直ふ芳兵衛の座敷小住は骸骨の



晩裔氏芳兵衛へ
 骸骨を描きて病
 苦を示し図

怪談の
 小澤芳兵衛

全神を画きて貴兄ハ程なく波様もろ染小成ぞとふしけれ
 バ芳を清し又悟る処ありて大い小狂び淫世の念を絶たる
 故に醫師の診察より猶軍軍餘りの命を延たりとあるん

○尾上菊五郎が所有する出雲の画

初代尾上杉屋の出雲重光の名人おしり其挿櫛は掛とうい
 自ら是と裏送りし御巻小用あたりとふん無きば其家代
 に出雲と為る小妙と浮たりしむ遂不出雲の尾上家の持
 藝を成さるが如し一回り下杉屋以来出雲の画少く出来物
 ければ是を求め所花と成したる故方今小ありし既小敷
 百種の出雲の繪と集め浮し出雲大衆といふも聲云小あり
 ずと算き一日晴高入尾上重光が家お玉り是を見り小京
 小人の噂し連つて終日わらも看考さぬ程の出雲と出

狩野素川繪鳥の図
 尾上菊五郎所蔵



以尾上菊五郎
 懐古堂蔵之印

曉斎幽霊の図
尾上菊五郎所藏



幽霊の図

郁回

丁了並べ且氏あり出雲の画を乞ければ元来氏に斯く異形
 の物と画くを好むの癖あり故一言のえふ是と肯罷り
 其所死中ふるま新圖と物一其他の出雲中より持野意何の
 画きし出雲と撰字りたれど合しては知小出せり矣出雲
 の或ひの有物と或ひの有物とを任意置ふ在る物と為る
 も是と見たりと言者多くい虚小し信と考るふ是らす因
 丁安の如何と知るる一それ雷の音を負ひ鬼の虎の皮
 の横鼻禿をメたると一殺少し出雲の姿も悲涼より出たる
 もの故河をを真と一河をを虚とせんや此れを只その筆意
 といりふも此一氣ふ見え斯く有らうや思ひ多し揮少画く
 とお平上手とい言あらんたふ掲げざる意門及び曉斎の
 画ける杯と出雲のまとは一可あらんり

○子弟として習生を専ら小為しむ
世に未だ文字を始ぬ一切の物を画し通用させ或
ひは後不傳えしや言れば何品少浪らま真を言し用み辨
せし物故真と字すがや一みえ解く真と字まことと覺えし後
小筆書と字あり固て習生に元筆書に楷飾元と飾と全
しや而し後小妙子の域にまゝ一特に近年字真出書
一切の物とて不真あり取り池沼又真と取ら事のと
づり固て我流の画も始ふ返り孫習生しや土甚と固め
るべうと以しと氏に初筆の生徒に教ゆら小鳥虫魚獸
の美別あり春の物を以し秋の物を以し一筆
生と習一と習するあり人小以て葉と花と画き又竹一筆と
画き梅鹿狗などとのと画く者何れとも是らに流らの懸と

小し画術を専門と為す小有らざるあり画を以て専門と
為る者へ目ふ己えら程の物品あり河小れ流小れそ
沖と習生あり流ると以て画を畫者とらるるれ取れむ
少年習が梅の枝と花を以て或は是と習生させ輪廻など
と捕えまきば又或は是と習生させ或は野に連ねて野の廣
漠たる風景と習させ或は山小流ひて樹木の森たる有
様を習生させし専ら真より筆を教ふるとも人固て氏ら少
年の生徒に教ふる様を固てしや九小掲げし幼稚の看る物
とハ為しぬ

○周三郎暎雲氏豊子暎翠氏の勉強

及門人等競ふや習生を勉む



外ノ二十九

曉齋氏門人へ
寫生を教ふの図



曉齋圖

時齋氏
猫の生寫



如畫
時齋氏

那洞

外ノ三十

元人毛益筆畫



毛益筆

毛益筆

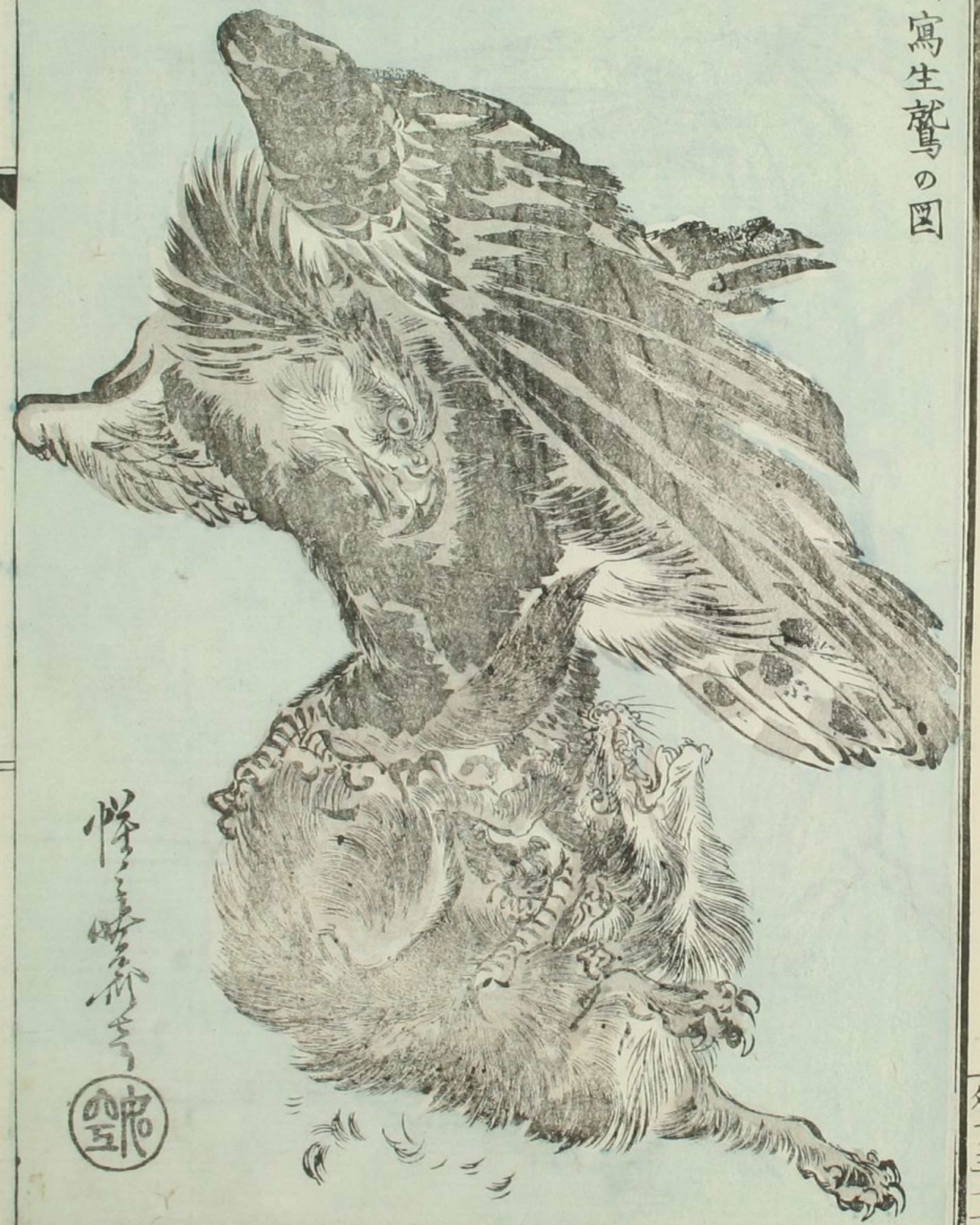
明保五年正月廿四日
怪陸石瓦乃



明和十一年三月廿七日
 如左世之代子
 藤田鳴鶴

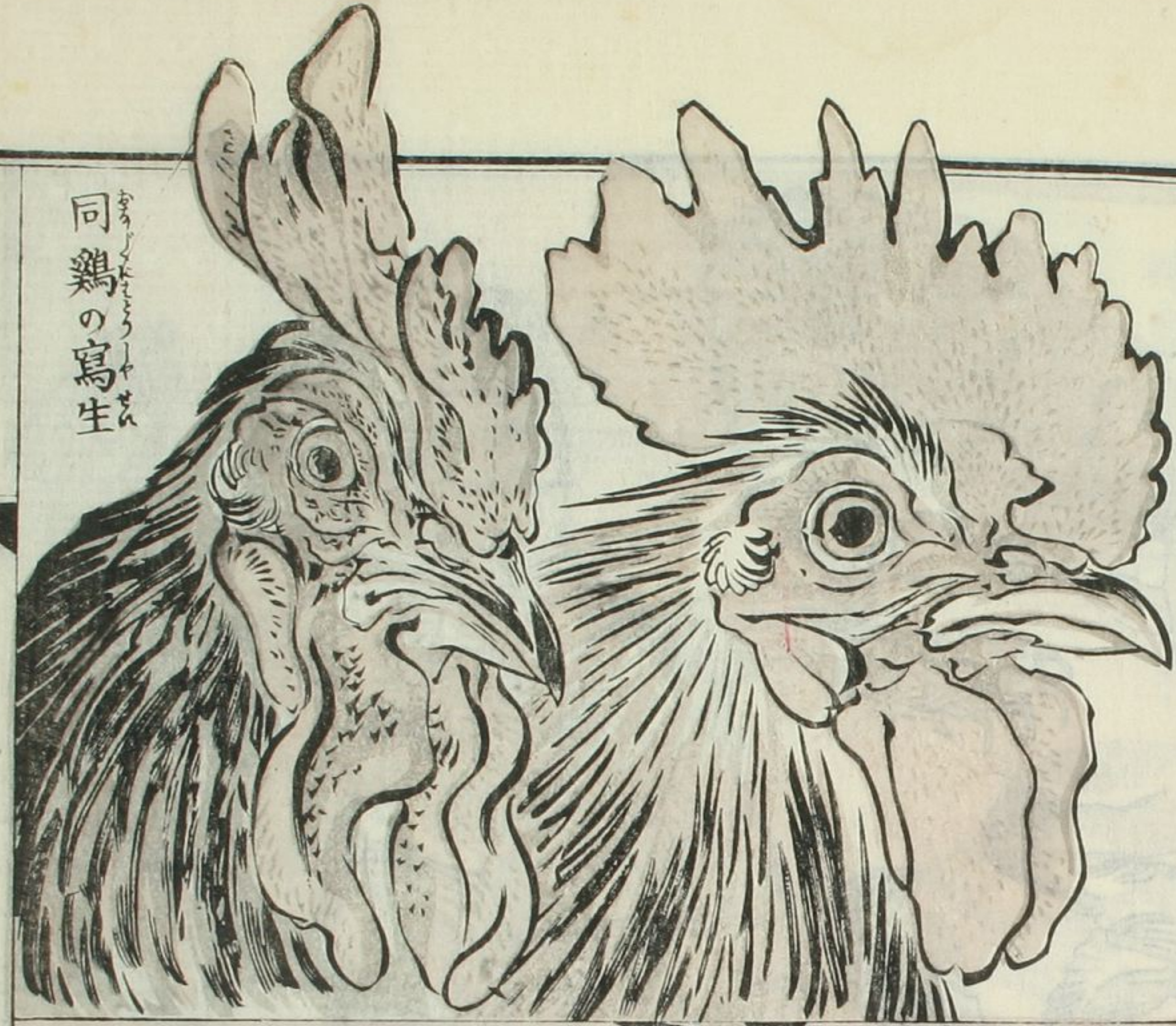
同様の寫生

同寫生鷲鷹の図



藤田鳴鶴
 画

同鶏の寫生



同亀の寫生



同寫生



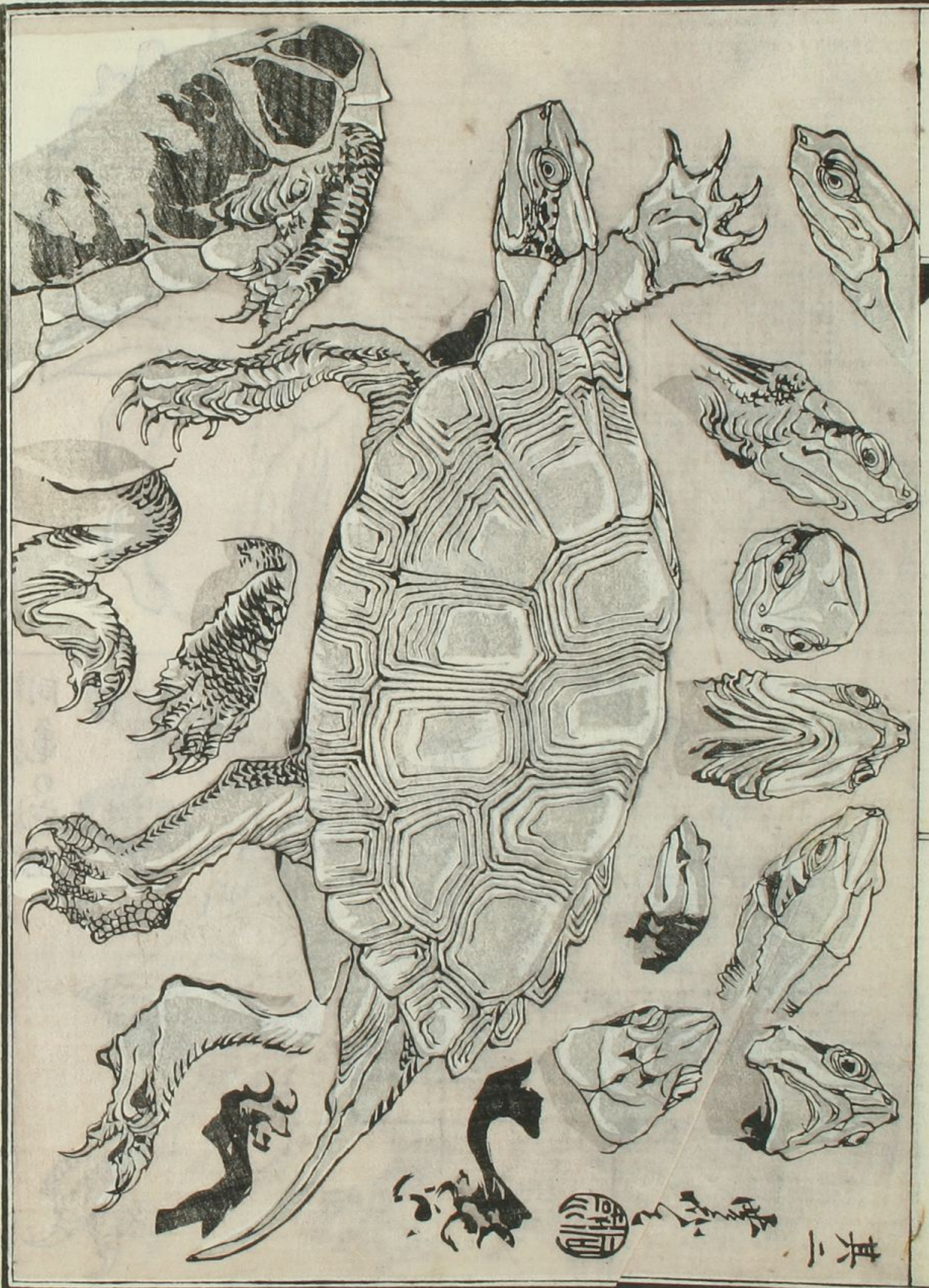
ろこ

とん
あう

せし

かあ

もぐら



其二

曉齋三郎

曉齋の男周三郎の筆



曉齋の筆

曉齋氏の娘豊子の画



曉齋平女

後編小顯も全躰の圖の一二を出せ

住吉弘定の箱書

大中臣能宣朝臣之圖

左京大夫信實朝臣真蹟

住吉弘定誌

能宣朝臣

畫賛

同裏古筆了伴の書付
海部卿從三位紫兼々真跡

ちとせま

古筆了伴
[Seal]

土佐信實の画平業兼の讚
河鍋曉齋の藏
 紙中九寸一分
 横八寸一分
 業兼ハ平相国清盛の祖三位正衡五代の孫元久三年
 從三位治部卿小任之後兼元三年五月十三日出家也

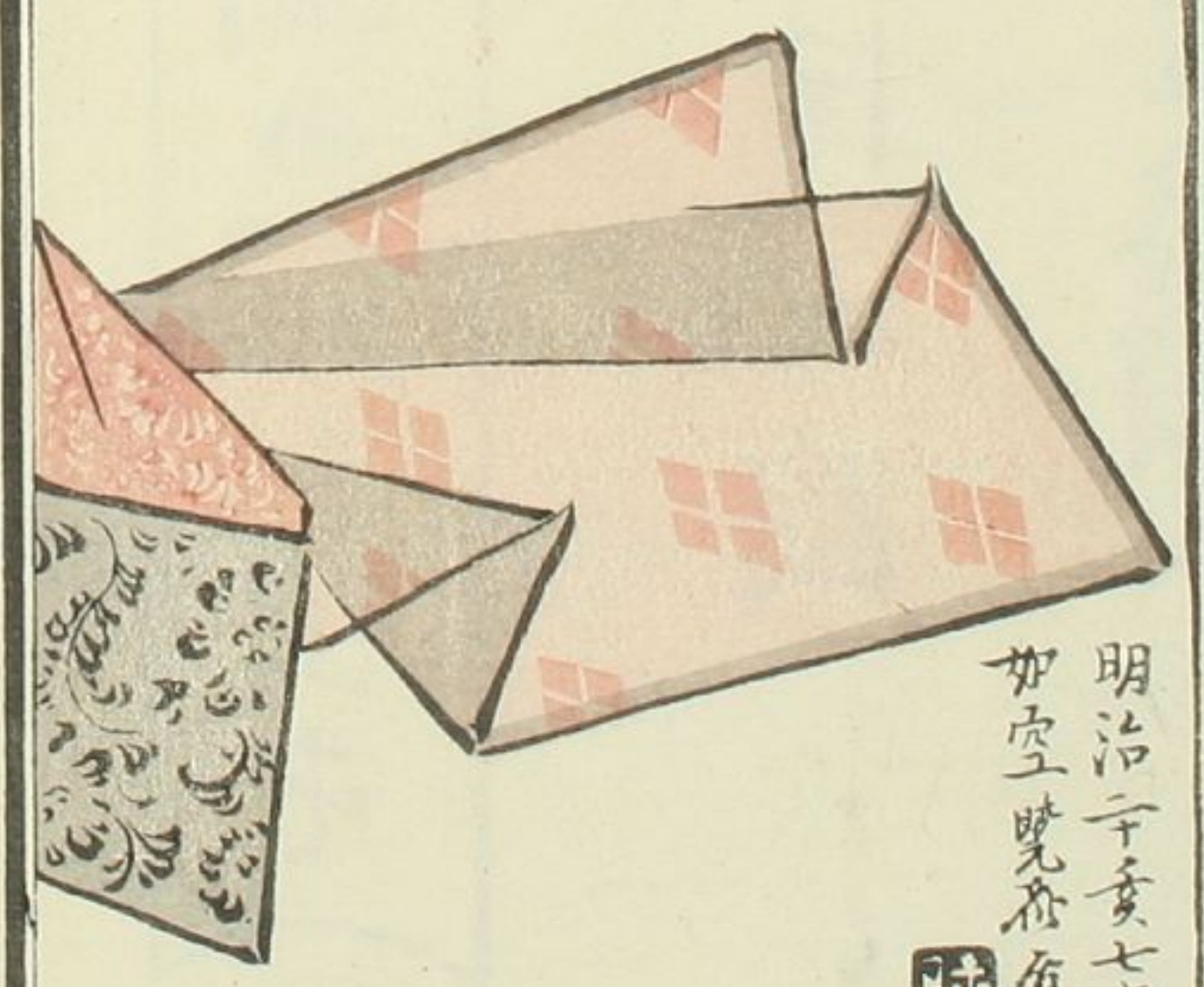
平業三郎

能宣朝臣

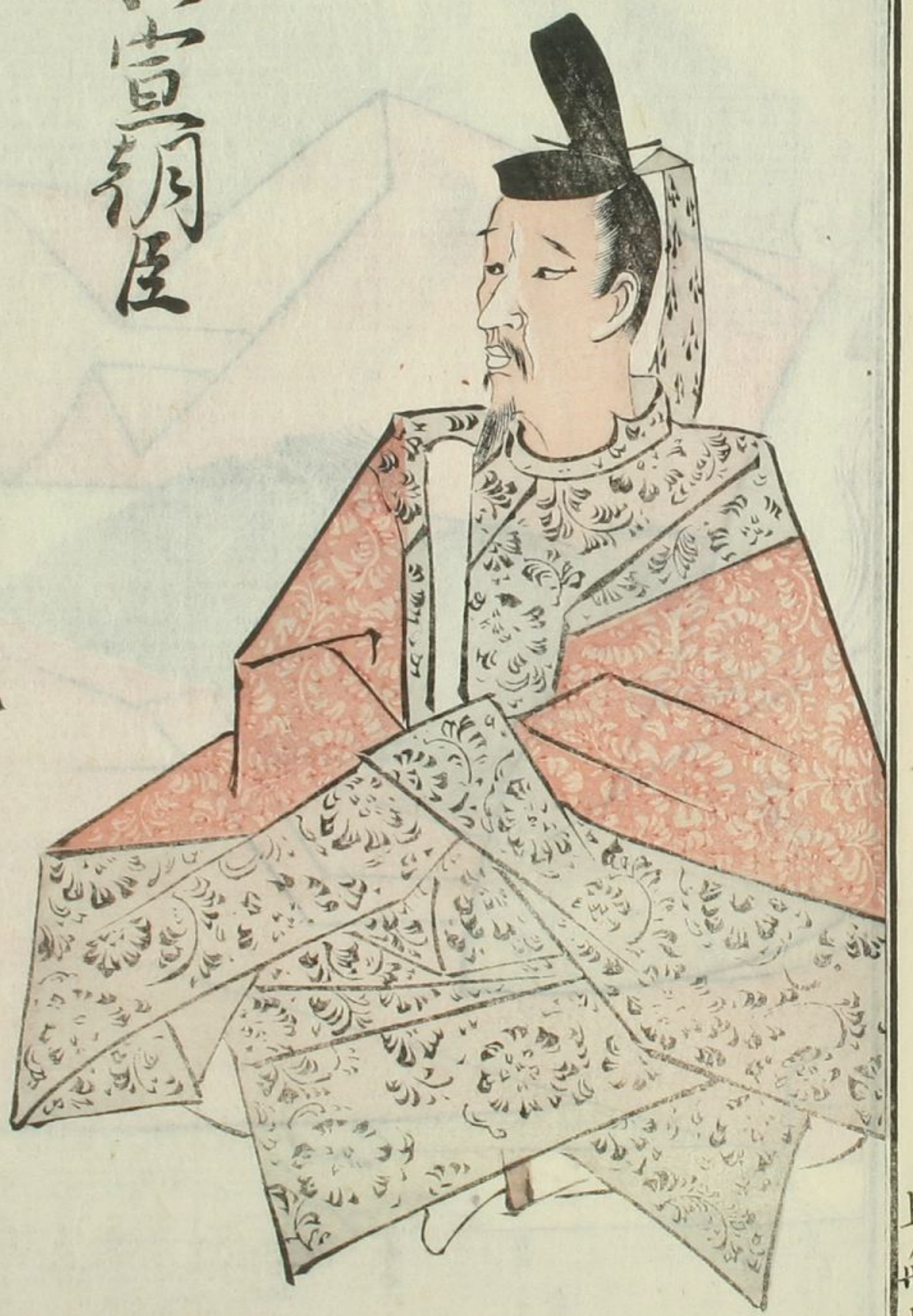


清讚 癸酉七月

明治二十五年七月廿二日
 河鍋曉齋藏之
 印

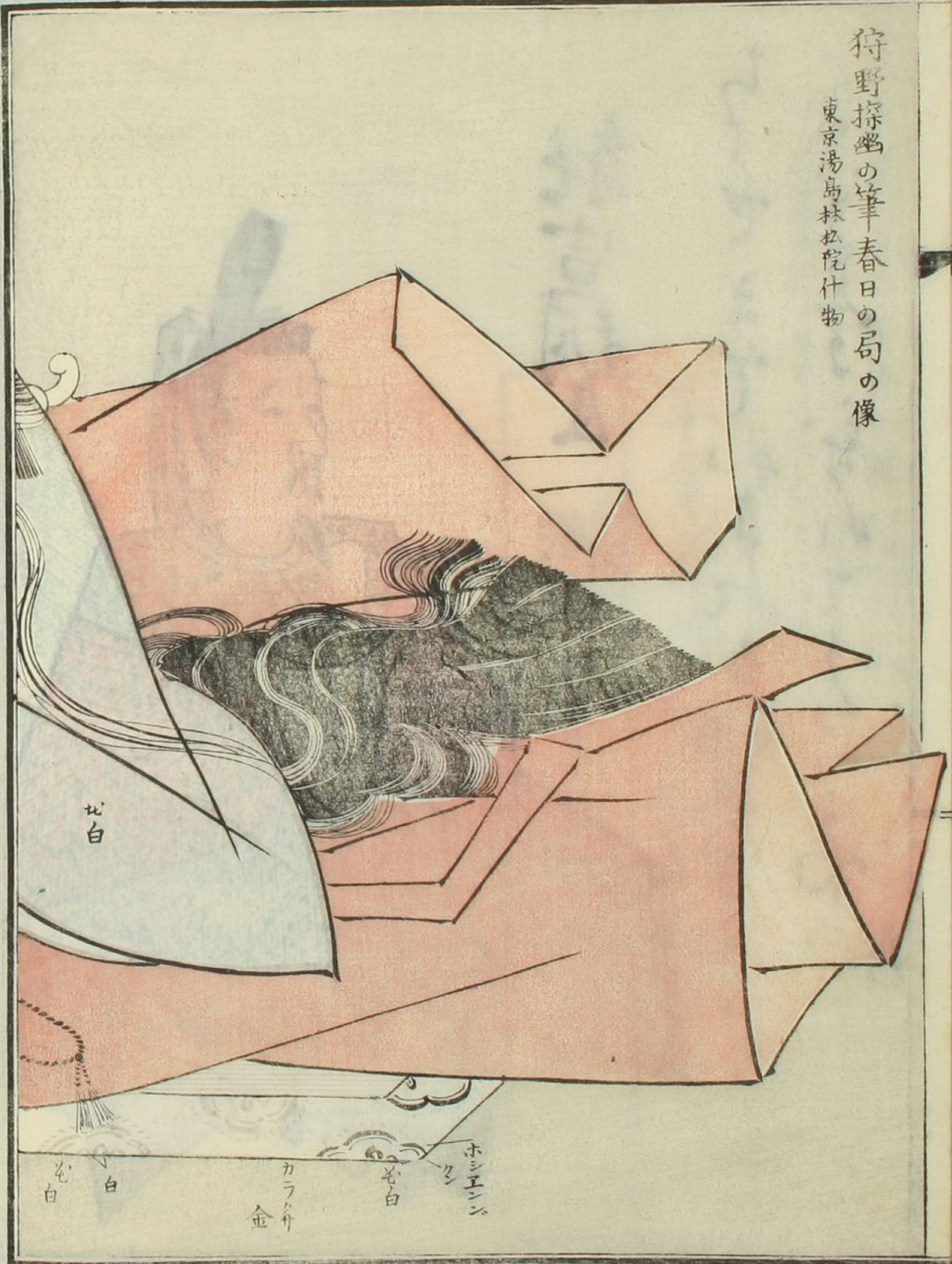


能宣朝臣

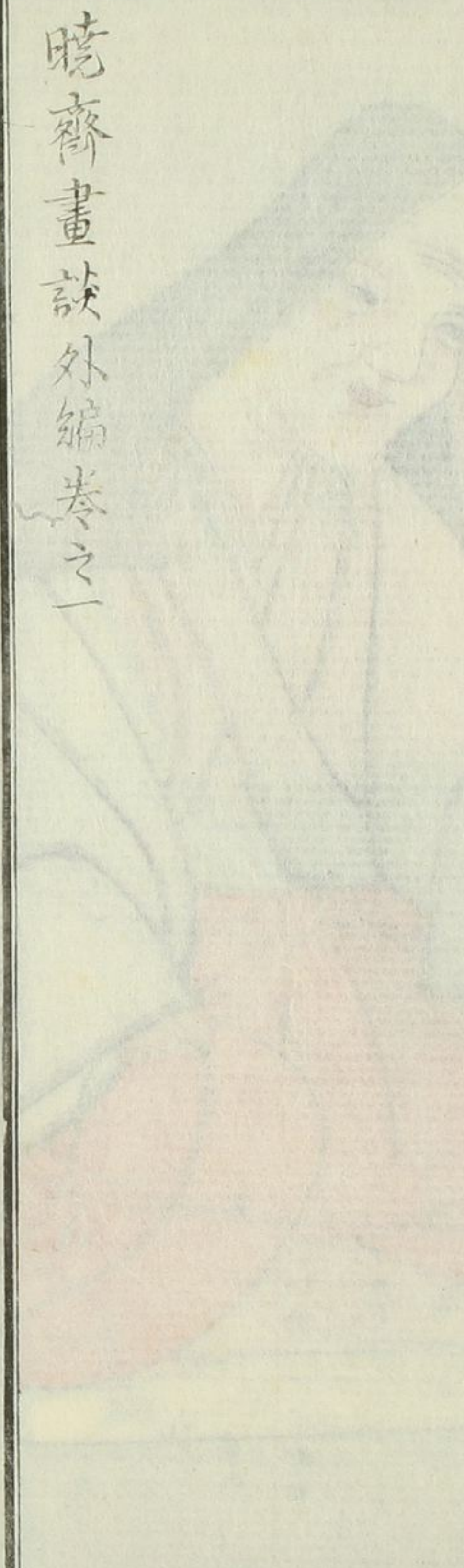


ちよせまてかきれる松毛しる
 ふあはまみよむられりまらつらわへ
 ちよ

狩野探幽の筆春日の局の像
東京湯島林松院什物



出板者曰猶晚高先生不諳了有名之古画の中より最出集
 よき物のとを撰と其在伸の圖と出して二冊小は立足編
 の後編と爲し又先生が例の画を以て画をせし五更
 の新圖且その得之の狂画より精密不字を倣したる物を
 集めて二冊小は立足を外編の後編と爲し追く出板は及
 附言 古画の年曆雲谷曾我長若川狩野の末流土佐住吉の
 末流時歴等を詳細不志とて後編不出



曉齋畫談外編卷之一

